



女性学がめざすものと、その教育について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國信, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005011

女性学がめざすものと、 その教育について

國 信 潤 子

1. ジェンダー論と女性学

私が勤務する大学では、将来、現代社会学部といった新しい学部を創設し、ジェンダー論をそのひとつの柱にし、さらにそれとは別に「ジェンダー・女性学研究所」をつくるという計画があります。しかし、ジェンダー論であれば、学部の専門科目として位置づけられるのに対して、女性学は1、2年生向けの教養科目で、入門的概論という位置づけがよろしいという見方が強くあります。ジェンダー論は専門的な学問研究分野として大学のなかにちゃんと位置づけられるけれど、女性学についてはそうはできないと思われているようです。この背景には、学問に対する男性中心主義の無意識的思い込み、それこそが「客観的」であるという先入観があります。

英語の *women's studies* という語は小文字だけで綴られ、女性に関する研究というだけの意味であり、*black studies* (黒人研究)、*minority studies* (少数民族研究) といった、比較的新しい学問の名称がほかにもあるなかで、これだけがとりわけ目だつという言葉ではありません。アメリカの大学では学部学生向けの入門コース的な女性学もありますが、そればかりではなく、社会学、心理学、文学、歴史学の専門的なコースや大学院のコースのなかに、*women's studies* があり、*feminist perspective*、あるいはフェミニズム理論というのが入っていますし、*men's studies* というのが入っている場合もあります。

ところが、これが日本で、日本語の「女性学」になると、事情が違います。社会学、歴史学といった学が並ぶなかに女性学を入れるのははばから

れる、これだけは異質なので排除したいという動きがまず出てきます。

2. リブと女性学

日本で「女性学」という言葉が登場した経緯については、日本女性学研究会の『女性学年報』10号掲載の論文「日本の女性学－その軌跡と課題」に書きました。1974年に婦人問題懇話会（現在の日本婦人問題懇話会）会報で、賀谷さんと辺輝子さん（現在の井上輝子さん）がアメリカ諸大学の女性学講座を紹介されています。ウィスコンシン大学やミシガン大学をまわっての報告です。お二人がアメリカの女性学講座を見に行くきっかけとなったできごとに、71年夏に信州で行なわれたリブ合宿があります。

71年のリブ合宿というのは、新聞には、女たちがヌードになって山中を駆けまわったといった、センセーショナルな面ばかりが強調されて報道されてしまったのですが、実は、女たちの相互的な意識啓発が成立した場であり、画期的なできごとでした。その後、全国にウーマン・リブの小グループが形成されていくきっかけになったという意味でも重要なものです。合宿では松井やよりさんが女性学の話をしたそうです。私は、women's studies というものがあるということ、あるいはそういう概念を、だれがいつ日本に紹介したのかをつきとめようと、この4、5年、いろんな人に話を聞いてまわっています。それが71年のリブ合宿だったのです。アメリカ留学などをした女性の大学の先生たちはもう少し前から知っていたようですが、一般の人々には最初の紹介となり、その意味でこのリブ合宿は新しいスタートでした。

その後は、リブと、女性学あるいはフェミニズムとは相互に食わず嫌いのような関係でした。それはそれぞれをになう階層が違い、になった女性たちの体験も違っていたからです。イギリスでも、フランスでも、アメリカでも、フェミニズムの動きを見ていきますと、になう階層の違いでフェミニズムの質も違ってきます。フェミニストとして発言し、それを行動に表わしていくにしても、その女性個人の社会的な背景の違いによって、フェミニズムの内容は違って当然です。日本でも同じことで、ある者が「フェ

ミニズム」と言えば、いやそれは「リブと言ってくれ」、あるいは「女の闘いと言うべきだ」といったように、言葉ひとつから合意は困難なほどです。しかし、それらさまざまなフェミニズムに通底しているのは、女性が男性に対して社会的に劣位に置かれていることを認識し、それを変革してゆく思想であり運動である、という点です。

women's studies が、日本で「女性学」という日本語になったときに、それをになったのが或る特定階層であることは非常にはっきりしています。その人たちは「女性研究」では物足りないという思いがあり、これはフェミニズムを根幹にもつ学なのだということで、women's studies の訳語を「女性学」にしたという話を聞いたことがあります。ところが、他方には、その「学」らしさに反発して、女性学なんていやだ、と離れていった階層の女たちがいます。「学」と付くとアカデミックな感じがして、活動家には近寄りたく感じられ、所詮はエリート女性のお遊びではないかという懸念や批判が、70年代後半から80年代初めには表明されています。女性学が拠って立つ基盤と、リブを支えた女たちの拠って立つ基盤とは、それぞれをになった社会階層について言えば、相互対立的な関係にありました。リブの女たちが激しく批判したのは、現在の家族制度であり、その家庭のなかで専業主婦となって夫の収入に依存して暮らしている女たちでした。日本の女性学が生まれてきた背景にはこのリブがあり、根本的には両者は互に通底する思想であるはずですが、それを表現する言葉が違う、になった人の体験が違う、ということでしょう。親近性が高いだけに反発も強烈です。

このあたりのことは、別の意見もあります。井上輝子さんはリブにもいたし、東大新聞研で東大の学生運動のなかにもいた方ですが、彼女の頭のなかでは女性学とリブと新左翼運動がひとつの流れとして見えているといえます。しかし、私にはそうは見えていないのです。私自身は、女性学という日本語がすでにできていた1977、78年の頃に、憤懣やるかたない子連れの専業主婦として同じような仲間と集まって、女性問題を勉強して、語り合い、叫びあった時代があります。そのときの自分の感覚と、いま、リブ運動の一次資料から読みとるかつてのリブの女たちの体験とは大きなへ

だたりがあります。

3. リブ意識の析出

日本のリブ運動の意識の析出を跡づけようとするれば、まず重要なのは、新左翼運動のなかにいた、主として社会科学系の女子学生の体験でしょう。1950年代、60年代の反体制運動のなかで、日本共産党の生ぬるい運動を批判し、理論面でも行動面でも先鋭的な運動をになっていた女子学生たちがいました。私は彼女らの20年後を追って、それぞれの個人史をインタビューしてまわる仕事を進めています。彼女たちが語る、新左翼運動の男たちとの確執、大学などで泊まりがけで続く運動のなかで、当然のように女に主婦役割、雑用係が押しつけられ、男たちの性の相手となる。そうした運動のなかの男たちの性差別意識と日々闘うなかから、女たちのリブ意識の目覚めが起こったのです。体験の内容は党派、グループによって違いますが、共通しているのは、大学を占拠し長期合宿状態で政治闘争が続くという状況ですから、日常性とはほど遠い場だということは想像できます。そこでは、家庭内性別役割分業などは問題になりようがありません。機動隊に殴られるということももちろんあるし、ほかにも物理的な暴力にさらされていた運動ですから、当時の運動がもとで健康を害したという女性もいます。そのあたりの状況は『女の思想』（サンポウブックス、1972年）の宮岡真樹さんの一文が生々しく伝えています。

ウーマン・リブ運動が街に出て声をあげた最初というのは、1970年10月21日、女性200人ほどが銀座で行なったデモでした。私は、そのデモの様子を撮った当時のニュース・フィルムを、NHKフィルム・ライブラリーで、知人の紹介を得て見る機会がありましたが、大変印象深いものでした。デモが行なわれたのは夕方で、薄暗いなか、女たちはヘルメットに顔面タオルを巻いた新左翼スタイルで、ゲバ棒をもって「女、解放、女、解放」と叫んでいるのです。まわりで見物する帰宅途中のサラリーマンは、どうしようもない女たちだと言わんばかりの軽蔑の視線を向けています。見物する女たちも同様です。夕闇のなか、デモの女たちは嘲笑の渦に囲まれ

ているのですが、そんな周囲の反応は当人たちの目に入っていない。彼女たちは、社会にどう受け取られるかなんてどうでもよかったのです。私は、70年代最初のウーマン・リブのデモが男性中心の左翼的スタイルのヘルメット姿で行なわれたことは見過ごせない事実だと思います。つまり、女の思想表現に独自の運動スタイルをもっていなかったということです。

そしてリブの女たちは、これでもかこれでもかと、女の性の抑圧状況を言葉にしはじめました。「お母さん、結婚て何ですか」「もう女らしさの芝居はやめよう」「抱かれる女から抱く女へ」といった訴え、そして新左翼運動のなかで男性同志との関係で中絶を繰り返してきた女の叫びなどがあふれだしてきます。そういうもののひとつに、リブ新宿センターのニュース『この道ひとすじ』があります。また当時の大量のビラには、女たちの叫びや怨念が生々しく綴られています。このあたりの一次資料が『日本ウーマン・リブ史』Ⅰ・Ⅱとして松香堂から92-93年に出されました。また横浜女性フォーラムでは、リブのビラやミニコミを写真にとり光デスクに入れ、1993年に、一般の人々がこれらの一次資料を見られるようになりました。

やがて1977年頃にはこのリブ運動は表面には見えなくなっていくますが、リブの精神は、その女たちのその後の生き方を変えていきます。その姿を追っていくと、運動に関わったことが彼女たちの人生に決定的な影響を与えていることはまちがいありません。過去の運動歴をいっさい隠して職についている人もいますが、体制的な職にはつかないという選択をした人、フリーの職についたり、専業主婦の立場で明晰なリブのラディカリズムをずっともっている人など、さまざまです。いずれにしても、彼女たちの体験は、女性学研究者の体験とは本質的に違うように私には見えます。

4. 「学問」としての「女性学」

女性学を掲げた日本初の国際会議と言えば、1978年8月に国立婦人教育会館に日米の研究者を集めて開かれた国際女性学会東京会議です。岩男寿美子さん、広中和歌子さんたちが企画したもので、これはウーマン・リブ

運動とは一線を画した女性学の国際交流をめざしていました。この会議に抗議するリブの女たちが会場にもぐりこまないようにと、参加は招待制にし、当時、ジャーナリズムの揶揄、嘲笑の対象となっていたリブとは違う、学問研究としてのアカデミックでスマートな女性学というイメージを強調していました。私は、そういう大状況はわからずに参加したのですが、そこで会った名門大学出の白人のアメリカ人はみなヤング・アカデミック・プロフェッショナルでした。78年のこの会議で言われた女性学は、いわゆる「客観的」な女性研究をめざすもので、反体制的なものではありませんでした。

78年から80年にかけて書かれた女性学に関する新聞記事は、かつて新聞がリブを紹介したときの揶揄、嘲笑の調子とは違っていています。女性学をになう人たちが、大学のなかにポストをもつ人々であったこと、つまりすでにある種の社会的なステイタスを築いた人であることが強調されています。こうして、女性学というのは学問研究として成立可能なのだという安心感を人々に印象づけたのが、この頃です。

70年代というのは、アメリカのフェミニズムの文献、資料の翻訳がいくつも出された時期でもあります。ベティー・フリーダンの *The Feminine Mystique* (1963) の翻訳 (初訳1972年) や、ラディカル・フェミニストによる小論集『リベレーション・ナウ!』の翻訳 (1974年) が出ています。そのなかには、ワギナ・オーガズムの神話の嘘を暴き、結婚制度は女にとって奴隷制であると告発し、レズビアンズムを提唱するといった、70年代アメリカのフェミニズムのなかにあるラディカリズムを伝える文が紹介されています。しかし、日本で翻訳した人たちは、運動家としてそうした内容を受けとめたということではなく、学問研究として資料を最大限に紹介しようという姿勢であったと思います。実は日本のリブも、同じような問題について同じような発言をしているのですが、こちらはマスコミから無視されるか、嘲笑的に取り上げられるかであり、その自生的なラディカリズムが当時出版物になったのは『性差別の告発』(亜紀書房) くらいで、充分伝えられることはありませんでした。同じようなことを言っているのに、女性学の「学問らしさ」を保つためには、リブと一括されることには恐怖

があったようです。この時点では日本の女性学は、女性の学者による翻訳学問のようにも見えます。学者と運動家の連帯が当時はなかったからです。その紹介が行なわれた場所は大学研究者のゼミ室や、彼女たちの自宅でした。1970年代末に私自身も日本女性学研究会を仲間とともに発足させ、子育てしながら仲間とまじったことは、本を読むことであり、デモや告発集会ではなかったのです。

これまでリブと女性学の接点については、正直なところ関心の中心ではなかったのですが、20年を経てふりかえってみると、日本とアメリカでは、ウーマン・リブと女性学の関係という点で、女性学の形成と展開が違っていることに気づいたのです。日本の足元の、草の根から湧き起こるどろどろとしたものも含んでいたリブの生々しい声には耳傾けられず、欧米の運動を研究として紹介したものであれば女性学として受け入れられたのです。この意味で日本で女性学が認められていくプロセスは、およそフェミニズム的ではなかったと言えます。土着のラディカリズムとは無縁なところで、女性学は市民権を得るようになったという経緯があったと私は見えています。

5. アメリカの女性学

アメリカの women's studies という言葉はリブ運動が展開するなかから生まれたもので、1965年頃から studies of women、research on women、feminist studies、feminist research などいろいろな言葉が出てきたなかのひとつでした。私はアメリカの70年代リブ運動の起源は、1957-58年頃にまでさかのぼると見えています。そこから60年代はじめにベティー・フリーダンの本が出て、次にはフリーダンが批判されて、それを乗り越える運動が出てくるといったぐあいで、次々と女性解放運動が展開していきます。67-68年に、西海岸の大学で自主講座として女性学が始まったのが最初だと言われています。アメリカ女性学の背景には、明らかに社会運動としての女性解放運動があります。大学当局と闘いながらその自主講座をになった人たちのなかには、主婦体験、新左翼運動の体験などがあって、大学に

再入学してきた女性たちが多くいました。1970年代末頃に大学当局は、女性学を認めると大学がレズビアン の 巣窟になると警戒して、彼女たちを排除するのに腐心していたと言われます。こうしてできあがった女性学ですから、それが認知されて、大学のなかで場所を得るまでには長い年月がかかりました。多くの場合、女性学講座はフェミニスト運動のリーダーの育成場所、そしてラディカル・フェミニストの拠点ともなったのです。

6. 女性学教育の課題

私は、8年前から常勤職で女性学を教えるようになりましたが、当初はなにか学問らしいことをしなければと気負った記憶があります。それで私がしたことは、ベティ・フリーダン、ケイト・ミレット、シュラミス・ファイアストーンといった、よく知られているアメリカのフェミニストを、その著作とともに紹介することでした。しかし、私自身がそれらの本から学んだ点、共感した点は多いのですが、学生たちにはもうひとつ共感できないようだ気づきました。70年代といえば、いまの大学生にとってはほんの子供の頃の話、あるいは生まれる前の話で、時代経験の共有がありません。私がどう懸命に話しても伝わらない感じがしました。学生からの反応は、なぜそう差別を言いたてるのか理解できないといったものが多く、やがて私としても女性学教育の方法論を再考するようになりました。アメリカのフェミニズムの資料を読みなおしてみても改めて学んだことは、女性個人の体験を踏まえた自己開示があってこそ、女性解放の課題が切実なものになるということでした。

この自己開示とは、フェミニズムの方法論のなかで不可欠なものだと私は考えています。フェミニズムは女性への性抑圧を見据えるものである以上、女性みずからがフェミニズムを自己の心のなかの現象として語るころからしか始まらないのです。性差別をまったく体験したことがないと言う女性も多くいます。しかしそのことは、女性差別がないことを意味しません。社会的に広くしかも構造的にある差別とは、往々にしてまったく認識されないものであるからです。過去の女性の歴史も、現在の女性の生き

様も、みずからの性抑圧体験の意識化とその言葉化なくしては理解できないはずです。

フェミニスト・メソドロジーとは何かについては、ここ10年ほど盛んに議論されてきました。まずフェミニズムという思想をここで仮説的に概念定義するなら、「歴史的にも現代においても、男性よりも女性を劣位に置く社会的に形成された性差別がある。この状況を認識し、それを改めてゆこうとする思想および運動である」といえると思います。この視点に立って、社会的な男女の関係性、つまりジェンダーについて考察することは、従来科学的と言われてきた方法論によっては、見えてこないものに目を向けることとなります。従来の方法では、実は男性の視点からの事実認識しかできないのです。女性が、感じてはいても語るべき言葉をもたされてこなかった多くの事実を光をあて、女が語る言葉を模索することが大切です。

そこでフェミニスト・メソドロジーでは、まず、主-客の分断を意識しつつ、しかしそれを意識的に乗り越えることが必要となります。私と他の女性は別の個人であっても、そこには女性であるがゆえに極めてプライベートなレベルで生活体験を共有しており、そこにこそ性差別があるという現実がある。つまり調査者としての女性と被調査者としての女性が、ともに性抑圧を受ける側にいるということです。第二に、数字に表示されるデータより、そうした統計からはこぼれ落ちるソフトな、記述的な事実に向けることです。第三に、仮説検証型の方法には限界があり、特に男性研究者による女性研究は、その研究者自身のもつ背後仮説が無意識的に事実そのものを変えてしまうという実態に目を向けなければなりません。その意味で、フェミニスト・メソドロジーとは参加観察的であり、かつ目の高さの共有が必要となり、調査者自身の自己開示、体験の共有が必要なのです。そして同性であることが、この性抑圧体験の理解度を深めもするのです。

さて、日本の女性学は、先述のように、70年代リブの草の根ラディカリズムと別なところで形成されましたが、いま、女性学教育に必要なのは、過去のラディカリズムを復習させることではなく、学生の現実のなかから学生自身のラディカリズムを引き出すことではないでしょうか。それは私

たち自身の自己開示の作業でもあります。差別の体験を認知できるかどうかは、空気のごとくになってしまっている差別に気づくことが必要です。そこで、まず、「女だから、男だからということ損したこと、得したことはありますか、役割や行動様式を限られて窮屈だったということはないですか」といった調子で話しかけ、学生にみずからを語ってもらい、私も体験を語ります。学生の日常の体験を踏まえて、その体験を意味づけるのに、これまでしてきた意味づけとは違う可能性があることに気づくようになる。これまであたりまえとっていたことがそうではなく、自分を縛っている拘束が拘束として見えるようになる、さらに、それが自分のたまたまの経験ではなく、この社会で女である以上避けられない経験で、差別は構造的なものだと気づくようになる、そういう気づきのレベルまでくるのに二年かかり、それで女性学の概論がおしまいになります。

京都大学で男子学生に教えたこともあります。おもしろかったのは、彼らがこの社会で男であるがゆえに強いられる抑圧に気づいていくのは、女がするフェミニズムの話聞いてというよりは、男同士のコンシャスネス・レイジングを通してであったことです。「自分の父親みたいな会社人間になるのは御免だ」と考え、社会が求める男らしさを神話として拒否していく可能性を求めるようになるのは、その場では、男として体験を共有する他の男の話聞いてのことでした。同じクラスにいた女子学生は、すでに京都大学に入学するまでに、女には期待されないことをやろうとする女として被差別の経験がありますし、女性学を受講しようというからには、そういう自分の体験の意味もわかっている人が多い。しかし、「女は男の経験を知らないから」ということで、男が女に説得されることは極めて少なく、フェミニズムと共闘することは男の沽券に関わるといった風でした。つまり、「マッチョ」な私たちで男性抑圧を認識してゆくという過程がそこにはありました。

さて問題は、とにかくそうして「気づき」のレベルまでは行けたとして、そのあとの教育です。その気づきに始まって、内的な動機に支えられてしっかり女性学を追究していけるようなコースが大学院レベルまで必要です。すでにフェミニズムにはたくさんの知識が蓄積されています。それを学ぶ

専攻学部が必要です。いまの日本の大学では、学部1、2年生のための概論だけというところにとどまっており、これは問題です。

7. フェミニズムのなかのラディカリズム

ラディカリズムというのは歴史のなかで変わっていくもので、その時代、時代のラディカリズムというものがあります。メアリ・ウルストンクラフトも、ジョン・スチュアート・ミルも、それぞれの時代におけるラディカル・フェミニズムを展開しました。今後、フェミニズムは時代の先端でどういうラディカリズムを切り開いていくのでしょうか。たとえば、1992年、全米女性学会（National Women's Studies Association）は開催できなかったのですが、その背景には黒人の女性運動家と、白人の女性学研究者のあいだに、学会の会費制度、発表者審査、出張旅費の配分などをめぐって意見の対立があり、問題が紛糾したためだと聞きました。その底には、アカデミズムのなかで行なわれている女性学に対する黒人や少数民族の女性たちの批判があります。特に黒人女性たちは、女性学がアングロ・サクソン系ミドル・クラスの価値観を反映しているとして、それに批判的です。また、フェミニズムという語についても白人のものという感じがあって、自分たちの運動はフェミニズムとは呼ばず、womanism と呼ぶという人もいます。

フェミニズムという語に対する似たような反発は、北京で1995年に開催される国連世界女性会議の準備会に、93年に出席したときも感じました。フェミニズムというのは西欧的な価値観にもとづく北社会の産物であって、南社会、第三世界の女たちにとっては抑圧的だと考える女性がいます。アジア・太平洋地域でフェミニズムという語を使うと、ときには、女たちの拒絶反応が返ってきます。自分たちがしているのはフェミニズム運動ではなく、「女の運動（women's movement）」と呼んでほしいといった話を、先月マニラであった ESCAP の NGO 女性会議で聞きました。

たしかに、フェミニズムは、そう呼ばれたくないものも含めて、いくつものフェミニズムがあると言うべきでしょう。これまでに会ったアジアの

大学で女性学を教えている人たちが話してくれたのは、日本での女性学教育と同じ悩みでした。フィリピン、インド、中国の大学ではこのところ女性学の講座が増えてきていますが、そこで教えている理論はイギリス、アメリカなど西欧のフェミニズム理論です。しかし、よその理論の紹介をしても、学生は簡単には受け入れないようで、それではアジアの土着的、自発的フェミニズムの理論化にはつながりません。北のラディカリズムと南のラディカリズムは違うと考えて、それぞれの状況のなかで新しいものをこれからつくっていくしかないのでしょう。

たとえば、母性主義 maternalism をめぐる議論には、北社会のなかだけでも、対立、批判と乗り越えの幾段階かがありました。かつて、母性主義的なフェミニズムというのもありましたが、それが70年代アメリカのフェミニズムでは、男や国家による女性管理の最たるものとして生殖機能の管理があると考えられ、母性主義フェミニズムは排除されました。しかし、その他方で、女が生殖行為への関心を失ったことはなく、精子銀行を利用する女性は欧米では年々増えています。拒否すべきは男による生殖管理であって、既存の結婚制度や一夫一婦制度、夫婦関係に縛られずに、母になる権利を手放すこともなく、生殖の自己管理をめざす女たちがいます。法的にも、アメリカでは、レズビアンやゲイのカップルに子供の親権を認める州も出てきています。20年前には、とても容認しかねると思われたであろうようなラディカルなことが、いまは受け入れられるようになっています。

ところが、これがアジアではラディカリズムでもなんでもないので。北社会の女たちは経済自立をして、女だけの家族で子供を育てても、シングルで子供をもっても、すべて家族なんだと言うが、そんなことはアジアの女にとってはめざすべきことではない。望まずして母子家庭、非婚の母となる女性が多くいる現実があり、それは改善を必要とする現実だということです。既存の婚姻制度、家族制度を打破しようとして北の女たちが主体的に選択している家族形態は、アジアでは選ばずして現実になってしまっています。それをよいことだなどと言ったら、男たちはますます無責任に女をセックスの対象とし、女は次々に妊娠しては子供を産んで、その責任

を女だけが負うことになります。文化規範や社会状況の異なる第三世界では、女だけで生殖の自己管理を達成し、経済自立をしようというのは不可能であり、ラディカリズムにはなりません。

60年代からヨーロッパ、アメリカなどで盛んになった新しい女性解放運動を背景に、「国連女性の10年」が設定され、女性たちはその新たな女性運動を国際条約にまで結実させました。それが女性差別撤廃条約であり、これは21世紀に向けて、女性差別撤廃を実現していくための国際憲法ともいうべきものです。日本政府も1985年に批准しました。その基本理念には「固定的性別役割分業の撤廃なしには、男女の真の平等はない」ことが明記されています。この考え方は、従来男女にあると言われてきた生得的な特性を生かした性別分業のうえに平等を築こうという、機能平等論を否定するものです。この脱機能平等論によってこそ、文化的に形成され、刷り込まれてきた性別特性から男女とも自由になって、真の個性発揮が可能になり、そうなるこそ、女性も人権を獲得できることになると思われま